

本
朝
目
録
史
考

——紫微中台遺品『判比量論』の研究——

高
橋
正
隆

一	紫微中台遺品『判比量論』につきて……………	一六
二	正倉院文書にみえる仏典目録……………	一四
	◇『判比量論』所載の目録……………	
	◇写経文書と佛典目録……………	
三	藏経目録と經典章疏目録……………	一六
	◇經典章疏目録と密教典籍目録……………	
	◇經藏目録……………	
	◇佛典目録と典籍目録……………	
四	高山寺聖教目録とその周辺……………	一七
五	鳳潭の『扶桑統入総目(録)』……………	一八
	◇『扶桑統入総目(録)』……………	
	◇『判比量論』の消息……………	

九無性指に為來初ハ初彼小亦主二比量證ハ法教
覺聖三指以是家初四^初阿含又ハ法教轉為道理
是聖教初ハ法教ハ是長持證ハ法ハ於
決中直證^ハ證^ハ主比量證^ハ 法證^ハ明^ハ有^ハ具^ハ年^ハ決
必^ハ有^ハ金^ハ方^ハ主^ハ決^ハ不^ハ指^ハ時^ハ所^ハ決^ハ然^ハ二^ハ六^ハ中^ハ三^ハ決^ハ指^ハ初
初^ハ初^ハ金^ハ方^ハ主^ハ決^ハ中^ハ極^ハ來^ハ六^ハ決^ハ為^ハ他^ハ受^ハ品^ハ自^ハ許^ハ八^ハ決
為^ハ自^ハ受^ハ品^ハ三^ハ決^ハ指^ハ因^ハ於^ハ假^ハ不^ハ指^ハ是^ハ初^ハ決^ハ因^ハ更^ハ之^ハ妙
主^ハ以^ハ轉^ハ指^ハ初^ハ為^ハ因^ハ於^ハ他^ハ受^ハ指^ハ後^ハ是^ハ決^ハ性^ハ指^ハ初
因^ハ二^ハ於^ハ自^ハ受^ハ品^ハ指^ハ少^ハ不^ハ能^ハ離^ハ不^ハ之^ハ也 三^ハ聖
十^ハ來^ハ唯^ハ決^ハ主^ハ比^ハ量^ハ主^ハ初^ハハ^ハ必^ハ有^ハ假^ハ有^ハ所^ハ依^ハ之^ハ決^ハ性
初^ハ初^ハ決^ハ決^ハ因^ハ不^ハ之^ハ在^ハ難^ハ初^ハ證^ハ主^ハ主^ハ初^ハハ^ハ必^ハ有^ハ

此集乃理古難思 自北冥玄微易經
今依聖典集一陽 紅通仙道派三世

此比量論一局 釋元曉述

咸亨二年歲在辛未七月十六日住持
名寺美華經說

一 紫微中台遺品『判比量論』につきて

昭和五十九年十月、大谷大学図書館では、故神田喜一郎先生の蔵書「倭古書屋」の典籍類を一括して寄贈をうけた。この蔵書を構成する多数の稀覯書のなかに、『判比量論』零卷三紙および $1\frac{1}{8}$ 紙がある。

『判比量論』は、新羅の元曉(六一七—六八六)の著述で、因明の論師として、つとに知られていた。慧沼(唐・六五〇—七一四)の『唯識論了義燈』、太賢(新羅・一七五三頃)の『唯識論学記』、善珠(一七九七—七十五才)の『因明疏明燈抄』、『唯識分量決』、そして藏俊(二〇六六頃)の『因明大疏抄』、『唯識本文抄』などに引用されており、元曉が因明に深い造詣をもっていたことについて明らかにされている。⁽¹⁾しかし、因明の学説に多大の影響を与えた『判比量論』の本文は、いつしか失われて亡失の書となり、わずかに廻向偈・識語の部分を藏経のなかにとどめるのみであった。これは『正日本統藏経』(二一九五—四)に収録されている。統藏経に所載された資料は、後述するところの再出現した『判比量論』の廻向偈・識語に依ったものと思う。

統藏経は、大正元年に完成したものであるが、この一大仏教叢書編纂の途上で、原本の書影が秀れていたゆえに、『判比量論』の廻向偈・識語は、明治四十五年刊行の『書苑』にその全容を影印に付して掲載されている。ところが、縮蔵および統藏経を骨格として、収録内容を増し、入蔵を加えて編集された『大正新修大藏経』には、なぜか『判比量論』の廻向偈・識語は再掲されなかった。

続刊の大藏経から除外されて、再び亡失の典籍となった元曉の『判比量論』が、再び出現するようになるのは、神田喜一郎先生が『優鉢羅室叢書』の第一冊として『判比量論』断簡を影印上梓されたことによる。⁽²⁾昭和四十二年のこ

とであった。神田喜一郎先生は、家蔵の多くの古抄本のなかに、「論草」と題する三紙の断簡の書風が、『書苑』に所載する『判比量論』の廻向偈・識語の書体と酷似し、また断簡の第二紙と第三紙の紙背に押印された「内家私印」の印影と、『書苑』所載の印影とが同一であることから、両者は僚巻の關係にあることを推定された。さらに富貴原章信博士によって、第十二、相違決定の全文が蔵俊の『因明大疏抄』に「判比量論云」として引用されていることから、この「論草」を『判比量論』の本文の一部と断定された。⁽³⁾『優鉢羅室叢書』は、少数限印であったゆえに、発行部数少なく、ゆえに書誌学的研究の部分のみ、『日本仏教』⁽⁴⁾に再掲された。ところで、『判比量論』断簡は、「論草」と題して、大正八年に催された香巖居士追慕の茶会に展示公開されたが、爾来五十年ののち、この「論草」断簡のもつ学術的価値が明らかにされたことになる。

『判比量論』は、咸亨二年（六七二）に著述された。「咸亨二年歲在辛未七月十六日／住行名寺著筆祖訖」とある識語による。そして、慧沼（六五〇—七一四）の著わした『唯識論了義灯』に、『判比量論』が引用されているから、元暁の著述後、かなり早い時期に唐に伝えられていたことが知られる。⁽⁶⁾また、本邦にも早くに伝えられたようで、正倉院文書には天平十二年（七四〇）頃すでに大官寺に在ったことを記録している。⁽⁷⁾富貴原章信博士は、『判比量論』が新羅から伝えられた可能性を示されたが、さだかではない。さて、本邦に伝えられてのち、わが国の一切経書写の写経事業が一応その目的を達したところ、写疏事業が本格的に開始されるようになると、伝来していた『判比量論』は、幾たびか書写されたようで、正倉院文書に見えるだけでも相当数に達する。現存する『判比量論』の断簡には、ともに「内家私印」という光明皇后（七〇一—六〇）ゆかりの紫微中台の蔵印が押されていることから、天平勝宝五年五月の紫微中台請留經目錄のなかにある奉写章疏集伝目錄に所載する⁽⁸⁾

○大品經疏 五卷 懷法師 一百廿八張

○判比量論 一卷 廿五張

○肇論 一卷 卅二張

○金剛三昧論 三卷 元曉 百七張

已上 四疏十卷同帙

と、目錄にみゆる「判比量論 一卷」と同一のものであることが明らかである。

紫微中台の蔵印である「内家私印」の印章が押印されているものに、『礼記子本疏義』、『瑜伽師地論』卷三十六、⁽⁹⁾同卷四十二、⁽¹⁰⁾同卷十五、同卷四十五などがあり、亦、正倉院に蔵する光明皇后御筆の『樂毅論』は、紫微中台の遺品としてつとに知られているものである。紫微中台の目錄にみえ、かつまた蔵印を押印して今日に伝える遺冊は、『判比量論』零巻のみであった。由緒をもつて、今日まで伝えられてきた紫微中台の遺品の『判比量論』であった。正倉院文書や、現存する各種の目錄によって伝本の多いと推定される『判比量論』であるが、断簡とはいえ三紙と廻向偈・識語のみが伝存してきた事情について考察を加えてゆきたい。

奈良時代に書写された『判比量論』一卷の紙数は、ふつう二十五紙であったようである。経師手実帳や章疏集伝目錄⁽¹⁴⁾などには、それぞれ「廿五張」と紙数を記載している。巻首と巻尾の余白を考慮すると、およそ1/8の本文が現存するわけであるが、諸論疏に引用された文献よりの再現、そして後述する手鑑に所載する十一行を加算すると、⁽¹⁵⁾約1/6程度の本文が確認できると思う。ところで、『判比量論』の三紙の断簡は、神田喜一郎先生の祖父にあたる香巖居士が、

慶雲三年（七〇六）写『浄名玄論』や、久安六年（一一五〇）の識語をもつ『三国祖師影』などとともに求められたもので、明治二十年頃と承っている。香巖居士は、明治維新の際に失われてゆく文化財の保護につとめられたことで、その偉業は『香巖居士薦事会記』の中で内藤湖南博士が詳しく述べられている¹⁰⁾。居士の五十回忌法要にあたって、昭和四十二年、『判比量論』は影印公刊された。その経緯については、既述のとおりである。

紫微中台の遺品である『判比量論』が公刊されて、有縁の人びとに贈本された直後のこと、酒井宇吉氏（一誠堂店主）から、氏の所蔵の手鑑のなかに、弘法大師筆「東寺切」として収録する十一行の断簡のあることを、神田喜一郎先生の許に報告されてきた。この手鑑には、文化七年に模刻した『判比量論』廻向偈・識語の部分を添えていること、そして天平の古薫をしのばせる独草の書風などと対比して同一のものと判断された。全文については、富貴原章信博士が、『日本仏教』に追記された¹¹⁾。爾来、筆者は神田喜一郎先生の下命をうけて、手鑑類の中から『判比量論』の断簡をくまなく探し求めつづけた。数多く現存する手鑑のうち、奈良時代からの書跡を収録するというものを調査する機会をえたが、再び同一の筆跡に遭遇することがなかった。ところで、この追跡調査の過程において、手鑑の成立上、基本的な相違のあることに気付いた。すなわち、紫微中台遺品の『判比量論』が弘法大師の書跡として愛蔵されるのは、文化七年（一一八〇）以後に求められなければならないということであった。結果として、今日、早い時期に出来て由緒を伝える手鑑などには、『判比量論』の書影は収録されていないことになる。弘法大師の書影は、「東寺切」「鼠心経」「ころころ経」という名称で手鑑に所載されているが、内容は密教に程遠いもののように判断した。また、酒井氏から『判比量論』という論艸の模刻の断簡を示されたが、俱舍字の論艸の一部であった¹²⁾。『判比量論』の廻向偈・識語の模刻と同質で、紙も同じであるから、この頃（文化七年）に同様の模刻がいくつか作られていたのではある

まいか。

昭和五十三年十一月十九日付、『判比量論』廻向偈、識語の部分出現の報せを、神田喜一郎先生からうけた。原本は、同年師走に入る前に、先生の許にとどけられた。

茶の掛物として表具され、よく觀賞された故もあって、墨色や「内家私印」の朱色が褪せた印象をうけたのは、私一人ではなかった。しかし、その危惧は、装潢を改めて、両紙をあわせて一卷にまとめられたときに一掃された。『判比量論』三紙の料紙は、茶毘紙と判断されていたが、昭和五十八年秋に改装されたとき、すべての裏打紙を取除き、原初の姿に戻したところ、極く薄い麻紙の姿がよみがえったことである。この料紙の特徴は、中国六朝時代の写経にまみられるものである。わが国では、写経事業が進展するころ、この種の料紙は姿を消すことになるが、録外の仏典を書写する場合には、書写の書体とともに、規格外の料紙を用いたことを思わしめる。同様な料紙は、慶雲三年(七〇六)写『浄名玄論』の料紙にみられる。ともに録外の仏典である。料紙が極めて薄いために裏打紙の影響が著しく認められたという事実を見逃すわけにゆかない。

手鑑に所収する奈良時代の書跡の筆頭は、大聖武・小聖武の名でもって代表される謹嚴な楷書体である。これに対して、草書体の書風は、弘法大師の名筆として「東寺切」「ネズミ心経」などの名を冠してきた。ところで、草書について、書道芸術史のうえで『浄名玄論』のごとき様々な評価が加えられていることは注意されよう。写経の書の芸術的評価は、遺品の比較検討とは別に写経事業の実態の認識の上に立つて為されなければならない一面がある。天平十七年五月十一日写経所解に、

……(経名)……

已上 一切經内

……（經名）……

已上 外写

とあって、写経の實際にあたつては、一切經内の經卷と、一切經外の經卷を區別してゐたことが知られる。そして、一切經の内外とは、「開元目錄内 開元目錄外」であつて、『開元釈教録』に所収する經卷を録外のことと意味してゐた。そして、天平神護三年二月二十二日類集の奉写一切經卷数注文案に、

合依開元一切經目錄一切底写経伍阡肆拾捌卷

と開元録の卷数を示しているが、『判比量論』は録外論六十八卷のうちに混つて記録されている。一般に、奈良時代の写経は、楷書体の謹嚴な書風で筆写されたが、録外のもものは草書体で書かれたものである。そして、当時、写疏所で書写する章疏などの底本のなかには、草書や草書を混えたものがあつて、写疏生や校正には草書の知識を求められたために習字を行ったようである。經師習字や草字釈文として樂書的に書蹟をとどめたものが正倉院文書のなかに伝えられている。結果、写経事業の推進によつて奈良時代の楷書が進歩したごとく、写疏事業は草書体の進展に大きな役割をはたしたと評價されている。草書になる章疏の底本として考えられる唐土の遺品として、『法華經玄贊』などの唐代の写本が中村不折画伯蒐集品のなかに認められている。

正倉院文書にみえる写疏事業關係の記録を一瞥するだけでも、かなりの録外の仏典が書写されていることを知る。写疏事業が盛んになるのは、天平十五年に写疏所が開かれてからのことであり、正倉院文書に草書に関する一連の資料がみゆるのは、天平十五年以後のことになる。草書で書写した仏典もあつたとみるべきである。さらに、手鑑のな

かに弘法大師筆として草書体を載せているが、密教に程遠い内容の論疏の断簡が多く、一考を要するのではないかと思う。紫微中台の遺品の『判比量論』の書影が、「東寺切」という名筆切の名を冠して弘法大師の筆とされた理由は詳らかでない。

『判比量論』廻向偈・識語について、弘法大師の真筆でないと断定したのは、久志本梅莊、大口周魚の『書苑』(七号)解説である。「内家私印」の紫微中台蔵印を根拠としたものであった。解説によると、『判比量論』廻向偈・識語は、伊勢山田の箕曲亀哉の蔵品であったという。この原本は、文化七年(一八一〇)に看松處士という人物によって模刻され、模刻の記(解説)には元暁自筆説を称しているが、『書苑』ではこれを否定して奈良朝写本と断定する。ところで、模刻の記は、昭和五十三年に神田喜一郎先生の許にとどけられた原本に、一紙付されており、管見の範囲では、酒井宇吉氏の手鑑に収載されているのみである。この手鑑には、九行分の断簡に付して模刻および模刻の記が貼継がれている。そして、弘法大師筆「東寺切」という名札を付していることは興味ぶかい。模刻の記によって、『判比量論』の独草書体の弘法大師説を否定している一方で、手鑑の銘では弘法大師説をとっていることである。『書苑』の解説では、文化七年に論疏の切断があったようにとれるが、模刻の記に従えば、このときすでに零本となっていたようである。したがって、三紙の『判比量論』の断簡は、かなり以前に識語の部分とわかれていたものと判断される。つまり論疏の断簡と模刻および模刻の記がセットされているのは、このとき名筆として好事家の間にわたれたものと考えられる。ただ、手鑑では、手鑑の伝統にしたがって、弘法大師筆と名づけたのではあるまいか。

唯識、因明について述べるとき、元暁説を必ずずといってよいほど紹介され、⁽⁹⁾『判比量論』の名がみえるのであるが、その本文が伝わるのは、諸論書に引用された部分と紫微中台遺品の零卷およそ $\frac{1}{8}$ 程度であった。いまは亡失の書

として扱われている元暁の『判比量論』であるが、一冊の著述がわが国の仏教教理史上において、如何様に評価されるべきか、それぞれの時代にできた抄本や刊本などが伝わらない以上、現存する仏典などの諸目錄の所説をかりて説明されなければならないかと思う。そして、仏典の諸目錄に接するとき、目錄編纂の事情を背景に、日本仏教文化史の根幹に接することができるのである。

- (1) 富貴原章信著『日本唯識思想史』（昭和十九年刊）72頁。同著「判比量論の研究」（『判比量論』昭和四十二年刊所収）4・10頁。
- (2) 初刊『判比量論』、次刊『久安六年本三国祖師影の研究』、三回『大乘理趣六波羅蜜經釈文』、四回『賢聖義畧問答』……。
- (3) 富貴原章信「判比量論の研究」（『判比量論』所収、昭和四十二年刊）、3・20頁。
- (4) 『日本仏教』29号（昭和四十四年一月）。
- (5) 『香巖居士薦事會記』大正八年。
- (6) 注(3)著述、5、75頁。
- (7) 正倉院文書 写経所啓（『正倉院文書』卷七—488頁）。
- (8) 『正倉院文書』卷十二—534頁。
- (9) 早稲田大学図書館蔵。
- (10) 大阪 山田嘉造氏蔵。
- (11) 愛知 関戸有彦氏蔵。
- (12) 根津美術館蔵。
- (13) 天平十八年写疏經師手実帳（『正倉院文書』卷九—147頁）。
- (14) 天平十五年写了律論疏章集伝等帳（『正倉院文書』卷二四—252頁。天平勝宝五年奉写章疏集伝目錄（『正倉院文書』卷十二—534）。
- (15) 富貴原章信・注(3)著述の64—76頁。

- (16) 『内藤湖南全集』十四卷13頁に、同文を載せている。
- (17) 昭和五十一年のこと。この調査にあたって、横超慧日博士の助言をうけた。いま、大谷大学図書館蔵。
- (18) 『判比量論』廻向偈・識語 影印解説(昭和五十九年十月刊行)。
- (19) 富貴原章信、注(3)著述8頁。
- (20) 拙論「麻紙の衰退とその復活」(中田勇次郎先生頌寿記念論集『東洋芸林論叢』昭和六十年刊行)252頁。
- (21) 拙論「慶雲三年写『浄名玄論』の書誌学的研究」(神田喜一郎先生追悼論文集『中国学論叢』昭和六十一年刊行予定)。
- (22) 注(21)論文。
- (23) 正倉院文書卷二—43頁。
- (24) 神護景雲元年九月二十六日奉写一切経司牒造東大寺司(正倉院文書卷十七—92頁)。
- (25) 正倉院文書卷十七—51頁。
- (26) 正倉院文書卷十七—47頁。
- (27) 内藤乾吉「正倉院文書の書道史的研究」(『正倉院の書蹟』昭和三十九年刊行)44頁。神田喜一郎「正倉院の書蹟の概観」(『正倉院の書蹟』11頁)。
- (28) 中村不折著『禹域出土墨寶書法源流考』下卷所収。
- (29) 内藤乾吉氏論文(注(27))46頁。
- (30) 注(18)『判比量論』廻向偈・識語影印本に附載。
- (31) 富貴原章信著『日本唯識思想史』72頁。

二 正倉院文書にみえる佛典目録

◇『判比量論』所載の目録

本朝目録史考(高橋)

『判比量論』の書名は、正倉院文書のなかに、十九箇所にわたってその名をとどめられている。そして、平安時代からのち、『亡日本統藏經』に至るまでの間、様々な目錄類に、『判比量論』の名がいくつか所載されている。正倉院文書の記載を含めて、順次列記すると、つぎのごとくである。

正倉院文書（ ）内は、『正倉院文書』所収の巻数・頁数である。

（文書名）

（文書記載年）

- 1 写經所啓 天平一二年七月八日 自常目錄写加經論疏□（七—488）
- 2 写了律論疏章集伝等帳 天平一五年 （二四—252）
- 3 大乘經并論疏名无宮目錄并名在未写天平一八年 （二四—397）
- 4 写疏經師手実帳 天平一八年三月廿日 （九—147）
- 5 写疏論集納受帳 天平一九年一〇月一日 （九—366）
- 6 經疏檢定帳 天平一九年六月四日 （九—384）
- 7 写疏所解 申見所写并未写疏等事 天平一九年六月七日 （九—386）
- 8 宮一切經故納櫃帳 天平二〇年八月四日 （十—322）
- 9 未分經目錄 天平二〇年一二月 （二四—540）
- 10 本經疏奉請帳 天平勝宝元年七月二八日 （十一—14）
- 11 一切經散帳 天平勝宝二年四月二二日 （十一—226）

12	一切經散帳案	天平勝宝二年八月一日	(十一—359)
13	造東寺司櫃納經并未返經論注文	天平勝宝二年一二月二四日	(十一—451)
14	〔造東寺司請經疏注文案〕	天平勝宝四年閏三月二八日	(十二—258)
15	從行信師所奉請經論疏目錄	天平勝宝四年十月二八日	(十二—385)
16	奉写章疏集伝目錄	天平勝宝五年五月七日	紫微中台請留經目錄(十二—534)
17	造東寺司移	天平神護三年二月二二日	(十七—47)
18	造東大寺司謹奏	天平神護三年二月二二日	(十七—49)
19	造東大寺司牒	神護景雲二年十一月十日	(十七—173)

『判比量論』所載の諸目錄

年 号	目 録 名	編 者
1	914 延喜14 『華嚴宗疏並因明錄』	円超
2	924 延長2 『山王院藏』	
3	1091 宣宗7 (高麗) 『新編諸宗教藏総目錄』	義天
4	1094 寛治8 『東域伝燈目錄』	永超
5	1176 安元2 『注進法相宗章疏』	藏俊
6	1250 建長2 『高山寺聖教目錄』	

本朝目錄史考(高橋)

7	1321（元亨元）『華嚴宗經論章疏目錄』	凝然
8	1633 寛永10『高山寺顯聖教目錄』	
9	1667 明暦3『釈教諸師製作目錄』	
10	1703 元禄16『諸師製作目錄』	
11	1738 元文3『扶桑藏外現存目錄』	鳳潭
12	1767 明和6『仏典疏鈔目錄』	興隆
13	1812 文化9『諸宗章疏録』	謙順
14	1907 明治40『卅日本統藏經』	
15	1912 明治45（書影を『書苑』に掲載。）	
16	1918 大正7（『香巖居士薦事會記に論艸として掲載。』）	

以上、正倉院文書の記載に十九件、平安時代以降の目錄などに十四件、『判比量論』一巻および廻向偈・識語の書名が認められるのである。厳密に言えば、大谷大学図書館が編集した和漢書分類目錄のごとき、続藏經所収の資料としての目錄⁽¹⁾の検出も出来る。また、継続して藏書目錄が編纂される場合、神田喜一郎先生旧蔵の紫微中台ゆかりの『判比量論』（原本）および影印本（昭和四十二年刊）を目錄上に掲げることになる。これらを如何に取扱うか、目錄作成上注意を求められる点であり、同時に過去に作成された目錄をみると、作成の意図を十分にくみとらなければならない筈である。

すなわち、『判比量論』の書影が模刻された文化七年（二八一〇）ころには、「偶得元暁大師判比量論断簡」という亡失に近い状態であったから、同じころ謙順が著わした『諸宗章疏録』に、『判比量論』一卷が存在するということが不自然になる。あるいは紫微中台遺品以外の抄本のあったことを想定しうるが、一方『諸宗章疏録』の編纂の意図を確かめる必要がある。また、『卍日本統藏経』に収録された『判比量論』が、後統の『大正新修大藏経』においては除外されているが、大正藏経に不載の理由を説明されないかぎり、目録の記載事実を示しただけでは十分に評価できない。目録の内容をつぶさに検討すると、それぞれの目録には様ざまな形態があるようにみかける。同様に、正倉院文書にみえる十九例の『判比量論』を所載する文書の機能についても無視できないと考える。以下、一時期は亡失の書となり、再び出現して、その文献的価値を改めて評価された『判比量論』を所載した本邦目録をとりあげて、その目録のもつ特質を検討し、元暁の『判比量論』の流伝の譜をたどってみたい。

近年、個々の本邦目録についての研究は、すでに多くの成果をとどめている。目録全般について、すなわち目録史研究の立場から述べられたものは、『日本文献史序説』⁽⁸⁾があり、このほか図書館史のなかで、⁽⁴⁾ままとりあげられた程度である。『国書総目録』が編纂されて、慶応四年（一八六八）以前の本邦人の手になる著述の網羅的書誌が完成すると、数十万余の著述の中から目録に関する部分のみを抽出して目録が作られた。⁽⁵⁾これらを手がかりとして、本邦目録の譜をたどるとき、『判比量論』の流伝のあとを明らかにすることが可能となる。

◇写経文書と仏典目録

奈良時代の目録について、当時の人びとの間では未だ書籍を目録することの大切さを認知しておらず、正倉院文書

中に写経目錄というのがあるが、この記録は写経の工程を示すにすぎないものという見解がある⁽⁶⁾。その立場は、仏典以外の典籍の目錄のみを、目錄の対象として把握しようと試みた点、問題がないではない。そして、天平二十年六月十日の「更可請草疏等」⁽⁷⁾にみゆる典籍に、仏典と外典を区別して記載せる体を目錄の一種として認知しようとされた。一方、仏教文化を無視すべきでなく、正倉院文書にみゆる写経目錄を分析して、単なる写経所の事務書類としての記録と、書目としての目的および形態を備えた文書記録が存在することに留意して、目錄思想の濫觴を天平二十年の「経卷納櫃帳」に求める見解がある⁽⁸⁾。その理由は、甲乙丙の櫃別に分類し、書誌上の記述の条件を整えているからとする。ところで『国書総目錄』では、つぎの八件の目錄を、目錄として収録している⁽⁹⁾。

（私云、正倉院文書卷頁）

奉写一切経目錄	宝亀三年	（卷十九—595）
奉写一切経目錄	宝亀五年	（卷二三—107）
奉写一切経目錄		（卷十九—597）
奉写小乗論目錄	天平勝宝五年	（卷十二—546）
奉写章疏集伝目錄	天平勝宝五年	（卷十二—543）
奉写大乘経律論目錄	宝亀三年	（卷二十一—1）
未分経目錄	天平二十年	（卷二十四—530）

『国書総目錄』が、どのような基準で例示したか詳らかでないが、例示のごとき目錄はこのほかにも数多く散見する。しかし、目錄という名称を冠しているものの、前掲の二つの見解からすれば、目錄の体をなさないということになる。

七略、別録を、目録の濫觴ということ、また、目録という語は、「劉向司籍九流以別爰著目録略序洪烈々々」という『漢書』の叙伝に初例を求めることは周知のとおりで、中国目録学については、幾多の著述がある。本邦における目録についての関心は、「現今の如く大小の図書館、到る処に設立されて、図書館学が優に一科の学を成せる時に於てすらも、此の支那の古き、發達せる目録学に無関心なるを免がれざるは、是非もなき事」と評されている。¹⁰⁾ また、「目録学は支那には古くからあるが、日本には今もって無い。これは目録といっても、単に書物の帳面づけをするというような簡単なことではない。……日本の目録には意味のないことが多い」¹²⁾ し、したがって、目録学は中国以外に存在しなかったと断定されている。目録学が不毛といわれたなかで、敬首和尚(二六八—一七四八)の『典籍概見』のごとき、ままだ目録学に近い著述のあったことも注目されるし、また、かかる著述があらわれる学問の背景を無視しえないのではないかと思う。同時に、個々の目録の特性を把握することから本邦における目録史研究の手がかりを求められるのではあるまいか。『判比量論』所載の目録を追ってみる。

正倉院文書、天平十二年七月八日①写経所啓(以降の数字は148頁『判比量論』所載文書の番号を示す)には、「自常目録写加經論疏□」^{章力}と標題に示すごとく、常目録に追加して書写するための經論疏のリストであった。この目録の中に『判比量論』一卷も含まれていた。同書名の文献上の初出例である。すなわち、經卷を新写するにあたって、古僧頭本三部、大官寺本四六部、西宅本二九部、審詳師本三部、海隆師本三部、角寺本十四部、玄印師本九部、玄曹師本二部、玄鏡師本四部、岡寺本一三部、道濟師本四部、願教師本一部、嚴智師本一部、都合一三二部八百十五卷を、常目録に加えるための借用目録である。『判比量論』は、大官寺所蔵のものであった。文書の發信人「石村布勢麻呂」を手がかりとして、藤原北家の写経であることが知られる。¹⁵⁾ 天平十二年(七四〇)以前に大官寺に請来されていた。この文書

にいう常目錄とは如何なる目錄であつたであらうか。

当時、写經事業は、『大唐内典錄』から『開元釈教錄』によって行われていた。もっとも目錄所載の經卷すべてを網羅したとは考えにくく、苦心のうえ經卷を集めていた様子が伺われるのであるが、天平七年（七三五）第八回遣唐使が帰国し、僧玄昉（一七四六）らが『開元釈教錄』二十卷および多数の仏典を多く請来すると、以後の写經事業は開元錄によって行われるようになった。⁶⁶ さきに示したように、開元目錄による録内録外の写經写疏の事業が実際に⁶⁷行われていた。藤原北家において求められた常目錄に未載の仏典をみると、かなりの量の典籍が早くから諸処に伝えられていたことを知る。ここでのいう常目錄が内典錄を指すか開元錄を指すか、あるいはまったく別個の目錄を指すか一考⁶⁸を要するが、写經事業が内典錄（三三六一卷）から開元錄（五〇四八卷）による写經へという、写經の所依の目錄の変更⁶⁹がどのような意味をもつものか看過するわけにゆかない。

梵本仏典が相ついで漢訳され、その量が多くなると必然的に仏典目錄が成立する。

綜理衆經目錄 一卷

華林園仏教衆經目錄 四卷

衆經目錄 五卷

衆經目錄 七卷

大周刊定衆經目錄 十五卷

大唐内典錄 十卷

開元釈教錄 二十卷

貞元新定釈教録 三十卷

これらの仏典目録は、唐土における典籍目録の変遷と不可分な関係をもちつつ編纂されてきたものであった。唐初になって、『隋書』経籍志による書籍の内容に関する目録が出来ようになると、仏典目録も同様により完全な目録が出現した。すなわち、どの点から見ても検索できるような方法を編み出した。書名から、翻訳者（仏典は大部分翻訳であるから）からと各方面から引出せるように工夫されたのである。開元録や貞元録は、みなこれらを充しているとい¹⁹う。

『漢書』芸文志から『隋書』経籍志に至るまでの中国の目録と釈教目録との関係を見ると、梁の阮孝緒が編纂した『七録』では、中国在来の典籍を内篇とし、仏教と道教の典籍を外篇とした。『隋書』経籍志では、經史子集の四部の区分をとりながら、同様に仏典類を附載として「仏經 千九百五十部 六千六百九十八卷」と記載する。のちに編纂されるものを含めて中国の目録のなかで仏典を付載ながら取扱っているのは少ないが、仏典が所載されなかったのは、仏教（道仙を含めて）の典籍を無視したことを意味するのではなく、開元録や貞元録のごとき、より完全な目録が成立していたからであると考えたい。しかも『隋書』経籍志から『唐書』経籍志に至る間に成立した本邦の目録である『日本国見在書目録』（藤原佐世撰）によって、はじめて仏典をすでに大成された目録の大綱から除かれたことは注目値する。

より完全な目録が出来て、その文化がわが国に伝えられると、この時点からわが国の文化に影響をうけ、後から再び新たな文化を受容しながら展開してゆくわけであるが、この現象の一端を写経目録のなかで認められないであろうか。本邦の写経事業は、内典録から開元録によって、目録所収の経巻を求めながら書写された。正倉院文書は、官設

写經所の關係文書を中心とした一大文書群である。写經所が発信した文書の控としての案、来信の文書、写經所内部の文書、そして雜類にわけられ、文書の機能に應じて書風に変化があつて、書道史上看過できないとされる。天平元年（七二九）八月に光明皇后の立后の儀が行われると、神龜四年（七二七）まで遡って存在したと思われる写經所は、新設の皇后宮職写經所と改称されるようになり、写經司と改められて天平十三（七四二）年ごろまでつづいた。天平十五年（七四三）ごろから經論の疏を専門に書写する写疏所を分設する。光明皇后の五月一日經は、天平八年（七三六）九月に開始され、途中一時期中断しながらも天平十四年（七四二）十二月までに四五六一卷の書写の功を終え、十二合の櫃に納められた。開元錄にみえる經卷の凡そ九割である。天平十五年五月より、開元錄にない章疏にまで書写の範圍を拡げ、底本を求めながら天平勝宝八年（七五六）末まで続行された。天平二十年（七四八）ごろから、写經所の經營は東大寺司の機構にくみ入れられ、前身の金光明寺写經所は東大寺写經所と改称された。東大寺写經所は総称であつて、写經の種類によって別の名称もあつた。

②⑧の『判比量論』所載文書は、天平十五年（七四三）五月から新しい方針によって再開された五月一日經が、同年四月に始まった大官一切經と區別されて官一切經と称された関連の写經の經緯を示すものである。②写了律論疏章集伝等帳は、天平十五年十二月二十九日写經所解に關連するもので、用紙の調達から校正の經緯を断片的に残すもの。③大乘經并論疏名无宮目錄併名在未写には官一切經未写の目錄中に載せる。④書写のため料紙を求め、⑤テキストを元興寺から借受けたようである。が、⑦天平十九年六月には未写の状態であつた。翌天平二十年八月には、「判比量論 一卷」として加えられた旨を⑧官一切經故納櫃帳に記録されている。

書写を終えた經卷は、納櫃されるわけであるが、論疏とりわけ録外の典籍は櫃を決定することが求められる。⑨未

分経目録に載せられた典籍は、分類区分のうえ櫃が決められるが、内容の検討という仏教学の大綱を理解し、分類区分する目録学的な知識を必要としたのではあるまいか。

天平勝宝元年（七四九）孝謙天皇が即位すると、光明皇后のために設けられていた皇后官職は拡大強化されて、紫微中台となった。天平勝宝五年（七五三）五月七日付の紫微中台請留経目録は、都合十五通の関連記録をとどめており、経巻の収録内容を知る手がかりとなる。

紫微中台請留経目録^{統々修}十二帙二裏（441）（一）内は正倉院文書卷十二内の頁数を示す

写経納櫃目録^{統々修}十二帙二裏（446）

写経納櫃目録^{統々修}十二帙十裏（460）………同上の案文^{統々修}十二帙十一（467）

写経奉請牒^{統々修}十二帙二裏（470）

大乘納経櫃目録^{統々修}十二帙二（473）

小乗納経櫃目録^{統々修}十二帙十（500）

奉写章疏集伝目録^{統々修}十三帙三（513）………奉写章疏集伝目録^{統々修}十三帙二（522）（上記目録を増補したもの）

奉写章疏集伝目録^{統々修}三十四帙一裏（543）

奉写大乘論目録^{統々修}四十四帙十裏（545）

奉写小乗論目録^{統々修}十二帙二裏（546）

未写経律論集目録^{統々修}十三帙四（549）

（料紙注文など文書を除く）

上記の目錄中には、案文と正本の両本、増補の目錄とを留めている。紫微中台御留本の『判比量論』は、草稿本の奉
 写章疏集伝目錄(513)にみえず、増補した奉写章疏集伝目錄(522)に所載されている。目錄には

大品經疏五卷懷法師 百廿八張

判比量論一卷 廿五張

肇論一卷 卅二張

金剛三昧論三卷元曉 百七張

「十九」 已上四疏十卷同帙

とあるが、官一切經納櫃の区分と異なる。また、この目錄には、

已上東第二厨子第五棚北

という附紙があつて、この仏典の置かれた場所を記録している。本来ならば、写經の功を終えるか、經卷を揃えたこと
 きに写經納櫃目錄(449)(460)などという一切經本目錄を作成するが、写經所の関連文書がそのまま本目錄を兼ねたこと
 は興味ぶかいものがある。

来信のなかには、景雲一切經書写のために造東大寺司から借出した經卷があつた。⑰造東寺司移、⑱造東大寺司謹
 奏、⑲造東大寺司牒がそれである。

一切經散帳など貸出の記錄のなかで注目されるのは、行信が借りた『判比量論』である。⑮天平勝宝四年(七五二)
 従行信師所奉請經論疏目錄によると、行信奉請(借出)の論疏は内裏の内室に在ったものと記されている。行信(一七五
 〇)は、法相宗、元興寺の僧で、聖朝四恩のために瑜伽師地論・法華經などの書写を発願したが、功を終えずに他界

した。ゆえに、その弟子孝仁によって、神護景雲元年（七六七）に完成した。法隆寺に現存する行信經の願文識語によって知られる。テキストの入手に苦心した模様で、一切經散帳のなかに借出人の名をとどめている。『判比量論』は、天平二十年（七四八）に借受けたようであるが、借受けたまま他界したことになる。¹⁵⁾ 文書は未返却を確認するもの。行信は、天平九年に聖德太子御製の法華經疏四卷にはじめ太子の御持物などを探し求めて法隆寺に施入した。¹⁶⁾ 行信の事跡のなかに、聖德太子ゆかりの逸書を収集し、録外の仏典を書写して法隆寺の經庫に加蔵するという書目録編纂に勝る偉業をとどめていたのであった。

正倉院文書の記録によって、元曉の『判比量論』は、光明皇后発願の天平五月一日經、孝謙天皇願經（景雲經）あるいは紫微中台写經など一連の一切經書写にあたって録外の典籍のなかに収録されていたことが判明した。奈良時代には、文献や遺品によって、権門貴族や寺社で、また知識經など一切經の書写があったことを知るが、『判比量論』のごとき録外の論疏も好んで写されたと思う。録外の論疏が受容られたのは、唐土より遣唐使や渡來僧などが伝えた彼土における最も新鮮な仏教學のテキストに強い関心を持ったからであろう。白鳳時代に伝わっていた録外の論疏のごとき、常目録に増補加入されなかったゆえに、録外の論書の書写にまったく加えられなかった論疏もあった。¹⁷⁾ 内典録から開元録へ、さらに録外の論疏を加えて、写經事業が一応その目的をはたした頃、写經の目的が讚嘆の心で行われ、經典の裝飾莊嚴化への道を進んでゆくことになる。¹⁸⁾

一方、唐では、『開元釈教錄』について、さらに入蔵を加えて『貞元釈教錄』（七九九）が編纂されたが、本邦では貞元録による写經は行なわれなかったようである。貞元録は、弘法大師空海によって請來された。¹⁹⁾ そして、平安時代の抄本をいくつか伝えている。大谷大学図書館には三種の貞元録の古抄本を所蔵している。

ア	康和二年（一一〇〇）	卷廿九	僧靜因
イ	永久二年（一一一三）	卷廿九	僧林幸
	永久三年（一一一四）	卷三十	僧林幸
ウ	大治三年（一二二八）	卷一	僧隆暹
	大治四年（一二二九）	卷七	僧隆暹

ともに、旧法隆寺藏本であるが、永久写本では、両三度の経巻調査のあったことを朱・墨書で記録しているから、法隆寺の経巻は貞元録に編成して整理されていたことになる。因に、法隆寺には行信願経を中心に一切経が揃えられていた。また、石山寺には、院政期の抄本と推定される貞元録がある。

- (1) 『大谷大学図書館第三和漢書分類目録』182頁。
 - (2) 『判比量論』廻向偈・識語の模刻の記（前章の注18）。
 - (3) 和田万吉著『日本文献史序説』（『書誌学大系』32巻・昭和五十八年刊。大正七年起脱稿の稿を上梓したもの）。
 - (4) 小野則秋著『日本図書館史』昭和二十七年刊、同『日本文庫史研究』昭和十九年刊。
 - (5) 私立大学図書館協会西部地区部会阪神地区協議会書誌学研究会編『日本古書目録集覧』予備版 昭和五十八年刊。
 - (6) 和田万吉著、注(3) 22頁・24頁。
 - (7) 正倉院文書卷三― 84頁。
 - (8) 小野則秋著『日本文庫史』上巻312頁。
 - (9) 注(5)『日本古書目録集覧』予備版によった。
 - (10) 内藤湖南著『支那目録学』（『内藤湖南全集』十二巻所収、昭和四十五年刊）。
- 武内義雄「目録学」（『支那学研究法』所収・昭和二十三年刊）。

清水茂「中国目錄学」(『世界古典文学全集』月報所収、昭和四十一年刊)。

倉石武四郎「目錄学」(『東洋学文献センター叢刊』第二十輯、昭和四十七年)など。

(11) 内藤湖南「敬首和尚の典籍概見」(『典籍の研究』第五号、大正十五年、『内藤湖南全集』十二卷461頁)。

(12) 内藤湖南「支那目錄学」(注1036頁)。

(13) 倉石武四郎(注10文獻153頁)。

(14) 宝暦四年(二七五四)刊。

(15) 内藤乾吉「正倉院文書の書道史的研究」(『正倉院の書蹟』33頁、昭和三十九年刊。井上薫著『奈良朝仏教史の研究』439頁)。

(16) 井上薫前掲注105著述348頁、内藤乾吉注103論文31頁。

(17) 正倉院文書卷十七—92頁、神護景雲元年九月二十六日奉写一切経司牒造東大寺司。

(18) 正倉院文書に開元録の初出は、天平十二年四月(七一485)である。同七月の写経所啓にいう常目錄を開元録と断定するのは無理かと思う。

(19) 内藤湖南「支那の書目に就いて」(『内藤湖南全集』十二卷459頁)。

(20) 『七録』の内容

經典録内篇第一 記伝録内篇第二 子兵録内篇第三 文集録内篇第四

術技録内篇第五 仏法録外篇第六 道仙録外篇第二

宋王儉撰の『七志』には、七志に加えて、道仏の二家を加えて附載する。

(21) 神田喜一郎「正倉院の書蹟の概観」(『正倉院の書蹟』10頁)。

井上薫・注105著述第六章写経事業の展開。

神田喜一郎 注21)文獻。

(23) 正倉院文書卷二—348頁。

(24) 正倉院文書卷十七—53頁。

(25) ①大小乗律論集伝など一八一七卷(坤宮一切経)を第七—第十五櫃に入れて渡す。②大乘経小乗経律論集など三九三卷(宮一切経)を櫃一合に入れて借出す。③仁王経讚述など一八七卷を借出す。

- (26) 田中塊堂著『日本写経綜鑑』昭和二十八年刊、153頁。
- (27) 一切経散帳（正倉院文書卷十一—227頁）。
- (28) 法隆寺伽藍縁起併流記資料帳』。
- (29) 拙論、前章の注(21)文献。
- (30) 拙論「経典の装飾」（『敦煌古写経』続47頁）。
- (31) 『御請来目錄』（『大正蔵経』55—1046頁）。
- (32) 『石山寺の研究』校倉聖教古文書篇51—56頁。

三 蔵経目錄と經典章目錄

◇經典章疏目錄と密教典籍目錄

奈良時代に書写された録内録外の仏典のなかで現存する卷子は、正倉院聖語藏⁽¹⁾に伝わるもののほか、行信願経を中に法隆寺で、また、後世になって補経して整えた石山寺の経卷⁽²⁾が知られている。そのほか市井に流出したものを数卷づつ所蔵されている。⁽³⁾また、古経目錄によって流伝の跡を探索することも不可能ではない。目錄を辿って、勅願の一切経はさておき、じつに多くの経卷があったかを想定することができる。が、その大半は失われているのである。おそらく、仏教研究のため読み尽されたか、次代に宋版本や高麗版本の輸入によって古い形態の典籍に関心が薄れたか、そのほか様ざまな要因があるかと思う。もちろん、新しい唐本の輸入以前あるいは以後にあっても、一切経の書写は行われていたが、奈良時代の写経の盛期とは趣きを異にして、讃嘆の意味がふかい。わが国でも、鎌倉時代初頭に一切経の刊行について浄土教団のなかで計画されたが、完成されなかった。⁽⁴⁾そのわけは詳らかでないが、単に立案

者の他界という理由だけでなく、新しく輸入された唐本への依頼度という面も無視できない。たとえば、その一例を示すと、春日版や浄土教版の盛行によって、嘉禄三年（一二二七）ころ『大般若波羅蜜多經』六百卷が刊行されると、幾度か刷本が作られた。山門では、山内や鞍馬寺に抄本や唐本の勝本を求めて二三ヶ月の間に校訂したもの⁽⁵⁾を伝えていた。そして仏典研究は、本朝所伝の抄本と唐本とを校訂して善本を求めたり、また唐本によって補写補経する場合⁽⁶⁾があった。

抄本から刊本へ、そしてかつて行われたテキストに忠実な写本作成から転じて、異本との校訂といった仏教研究の基礎的方法の展開は、わが国の仏教教団史の消長とは無関係でなかったと考える。仏教教団すなわち宗派の成立とその発展については、すでに多く語り尽されており、教団の所依とした仏教典籍について、早くから研究調査の手が様々な形で加えられてきたことはいうまでもない。ところが、典籍についていえば読み切れて多くを失われた文献のなかにこそその教団史の正姿があるわけである。が、案外にこの点が放置されてきた。⁽⁷⁾現在に古抄本や古刊本を多く伝えている文化を過大評価してはならない。何故ならば、読まれなくて遺された可能性も十分に在るからである。また、よく進んだ宗教・思想・哲学的研究の立場から、祖聖が門弟の人びとにすすめた仏典は何であったかという点を見逃してしまう場合もまま在るかと思う。それぞれの時代に、仏典が読まれてきた実態を知る場合、目録や引用例から判断することは可能である。

『判比量論』についていえば、『山王院藏』（『新編諸宗教蔵総目録』高麗・義天録）、『東域伝燈目録』（永超録）、『注進法相宗章疏録』、『高山寺聖教目録』、『華嚴宗経論章疏目録』などに収録されている。また、『判比量論』が引用された文献には、つぎのものがある。

唯識分量決(善珠)

宝亀三年前(七七二)

因明疏明灯抄(善珠)

天応年(七八一)

因明大疏抄

仁平二年(一一五二)

唯識本文抄⁽⁸⁾

因明や唯識の研究書に主として引用されているが、平安時代末葉ごろ、引用書名を具体的に示さないまでも、仏教研究の基本図書として利用され、周知の論疏であったと思う。

『開元釈教録』や『貞元釈教録』が、入蔵を増して編纂された上に、かなり詳しい考証を経て単なる仏典の列挙にとどまらない仏典目録が出来るが、わが国では録外の論疏の書写事業に伴って、仏教の学問の体系に従った目録作成のため苦心された。正倉院文書のなかにかいまみることが出来る。『判比量論』は、永超の『東域伝燈目録』や義天の『新編諸宗教蔵総目録』に所載され、本朝と高麗両国の仏典章疏目録にみえる。『東域伝燈目録』は、興福寺の永超が弘法の志をもって、名山宝蔵に所蔵する經疏類を見聞して、その書名を編集したものである。先行の目録類などで典拠の明らかな事柄について書添えて所在を示すなど、目録製作にあたっては正確を期していた。目録記載中、とくに注記しないものについては、編者が興福寺山内で閲覧したものである。⁽⁹⁾『判比量論』は、「講論録 三」の因明論を集めた資料群のなかに注記を付せず所載するから、編集の当時には興福寺山内に在ったとみてよい。永超は、比叡山教円に学び、師命によって興福寺の主恩の門に入り、俱舎唯識を修めたが、山に戻らず、よって寛治八年(一〇九四)に、見聞した經典章疏の目録を編んで青蓮院に献本したのが『東域伝燈目録』である。⁽¹⁰⁾高麗の義天録ともに因明の門下に『判比量論』を所載する。永超録・義天録は、ともに經典章疏の存在を把握する手がかりとなる目録として評

価される。

永超録が編集される以前に、醍醐天皇の勅を奉じて、東大寺の円超が、華嚴宗章疏ならびに因明録を、延暦寺玄日が天台宗章疏を、元興寺安遠が三論宗章疏を、東大寺平作が法相宗章疏を、薬師寺栄穂が律宗章疏を撰録して進上したものがあつた。円超がこれをまとめて奉獻したゆえに「五宗録」の名がある。五宗録のなかで、『判比量論』を所載するのは、『華嚴宗疏並因明録』で、因明録の筆頭にこれを記載する。他の四録には『判比量論』の名がみえない。五宗録は、仏教伝来より延喜年代(九〇二)に至るまでに請来された經論疏釈を各宗ごとに選択リストした目録で、各宗に必要な基本典籍目録の形をとるもので、所蔵目録とか、初学案内を目的とした目録ではない。実際には、五宗録の論疏はそれぞれ相互に用いられるべき内容のものである。のちに、藏俊が編纂した『注進法相章疏』(安元二年・一七六撰)には、「判比量論一卷 元曉」と、目録に収録して、法相宗の基本典籍としている。さきの平祚の『法相宗章疏』には不載であつたが、平祚録の巻尾が欠落のまま伝わっているものか、当初から不載であつたのか詳らかでない。が、後続の目録によって、『判比量論』が法相宗の基本典籍であつたことは認められる。

五宗録や永超録そして藏俊録は、選択、網羅的といった目的をもつて編纂されたもので、永超録のごとき各宗を綜合して章疏を網羅的に収録した目録でありながら、密教の典籍について触れられていない。本邦へ密教の經典が請来されたのは、すでに奈良時代に認められるが、儀軌等を含めた密教典籍の将来は弘法大師空海や伝教大師最澄をはじめとする入唐僧や渡来僧による。そして、安然是、元慶九年(八八五)に、最澄・空海・常曉・円行・円仁・恵運・円珍・宗叡の入唐八家の請来目録を整理して十六類となし、さらに延喜二年(九〇二)に、八家の秘録によって二十類にわけて密教関係の典籍を整理した。名付けて『諸阿闍梨真言密教部類総録』という。編集の立場は、開元録から貞元

録が成立する間に、貞元録には真言密教関係の典籍の入蔵があったが、陀羅尼法など儀軌類の典籍が不載であったゆえに、八家秘録によって目錄を編んだという。¹⁰³ もって真言密教の典籍のほぼ完全な目錄が作成されたことになる。

請来目錄について、請来された品目は仏典だけにとどまらず、したがって仏教はいうに及ばず、わが国の文化芸術に様々な影響を及ぼしたといわれる。¹⁰⁴ ところが、智証大師円珍の場合、大師は入唐にあたって仁寿三年（八五三）七月一日太宰府に差出した牒¹⁰⁵のなかに、「隨身物 經書肆百伍拾卷 三衣鉢器剔刀子雜資具等名目不注」とあって、經卷四五〇巻を携えてゆかれたとある。本邦に流布の仏典を唐土の原本と校訂補充のために持参されたのであった。そして帰京後、彼土で得たところの經典一千余巻を請来目錄とともに太政官に納められたが、のちに下賜をえて三井寺に唐院を建立して蔵書を納められた。仏典の校訂補充を目的の一つに加えられた入唐であった。円珍はまた、闕經を唐より取寄せたり、入唐の僧に仏典の書写を依頼して将来されたごとく、經典章疏の充実を図られた一面もあった。¹⁰⁶ かような仏教の学問の展開の結果、安然の密教典籍の体系的な整理という形で示されたことになる。密教典籍の目錄については、『真言宗所學經律論目錄』¹⁰⁷ というのがあって、弘法大師空海が經律論の三藏にわたって真言学徒の必要な典籍を選択された目錄と伝える。

密教は、東密のなかで、空海が請来した真五祖影から空海の真影などを加えて真言八祖影を造頭して奉置されたが、やがて密教の伝持を三国祖師影として顕わすようになった。真言八祖影に加えて、三十六人の祖師影を奉置することになったが、近年これらの祖師影を失名した。¹⁰⁸ 三十六祖影について、安然は、『悉曇藏』のなかで、老子・孔子はいうに及ばず、中国の開闢神話に登場する伏羲女媧を含めて化胡思想の展開のあとを説いていた。失名の祖師影は女媧であった。¹⁰⁹ もって、安然の密教研究史のなかにおける立場を説明できるであろう。密教の僧侶の血脈相承は、平安時

代の末葉になると従来の単なる流派の相承に満足せず、いくつかの流派を踏襲する態度から、高德の阿闍梨について伝授をうけ、他の法流をも相承するようになった。そして、自らの法流を示す立場から、血脉系図や典籍目録を作成する。多くの系図や目録が現存し、寺院の経蔵調査目録のなかでいくつか紹介されている。²⁰⁾

安然の目録のごときが成立していた故をもつて、『東域伝灯目録』のなかに、密教典籍類が収録されなかったという一面が考えられる。一方、叡密には、儀軌・図像などを多く含む密教の典籍を、経・論疏を中心とした大蔵経目録や章疏目録に繰入れることは馴染まなかったのではあるまいか。仏典の目録加入については、のちに編集される諸目録もほぼ同様な形を踏襲するようである。すなわち、入蔵を試みて順次成立した大蔵経目録や経疏章目録と密教典籍目録とは、自ら目録の体系を異にしたといえる。このことは、のちに成立する宗派宗学の上で編集される目録についても同様である。

◇経蔵目録

貞元録のごとき入蔵を増して大成した大蔵経目録、そして経疏章目録や密教典籍目録などが整備されると、これらに従って経蔵の蔵書が置かれ、蔵書目録もまた完備された、法隆寺一切経は、貞元録に依って補経のうえ整備されていた。青蓮院吉水蔵にある『山王院蔵』は、延長三年（九二五）に編集されたもので、もと四帖あったが、現存するものは、顕教、密部、伝教大師著述の目録の部分である。²¹⁾『大蔵会展観目録』には、伝教大師関係の部類に紹介されているものであるが、山王院は智証大師円珍を指すことから大師ゆかりの蔵書目録ということにもなる。台密関係の目録には、『判比量論』の書名は見当たらないが、『山王院蔵』の中にのみ因明関係を集めた帙に収録されていた。智証大

師には『山王院藏書目錄』という親撰の目錄があつた旨を、『本朝台祖撰述密部書目』智証大師の条でみかけるが、同一のものであるかさだかではない。仏教の教理研究には、因明は避けて通ることができなかったものである。この事情を物語るかのように、台密の経庫のなかに『判比量論』を収蔵していたのであつた。経蔵目錄などによって確認できないが、他を類推することは許されるであらう。

『判比量論』を所載する目錄のなかに、高麗の義天が撰集した『新編諸宗教藏総目錄』がある。教藏目錄の名があるごとく、義天録は、その序文によると、開元録のごとき経録の完全なものが出来て経論の伝持に便宜を与えておつても、章疏類の目錄が完成して、これらの散逸を防がなければ仏陀の遺教を護持することが不能という立場に立つて編纂された。内題に「海東有本現行録」とあるが、この目錄は、一〇九〇年ころ朝鮮に在つた経律論の章疏を中心として、中国や日本にも求めて記録した目錄である。外題に示されたごとく、所在を確認した上での目錄であり、時を同じくして成立した『東域伝灯目錄』とともに、彼我の国において本格的な章疏目錄が編まれたことになる。かかる目錄編纂の背景には、中国で発達した目錄編纂の影響のあつたことは当然のことである。

◇仏典目錄と典籍目錄

仏教の発展に伴つて、限りなく多くの典籍を遺してきた。抄本や刊本などで現存する典籍、そして、これらに記録された訓点などの加筆の跡を辿ることによって、仏教文化の展開のあとを知りうる。また、読みつがれて失われた個々の典籍についても無視できない。孤本というものが、案外、読み切れて失われた結果から生じることについては問題視されていないように思う。現存する遺冊を集大成して、主題の文化論を取扱う場合に周到な注意を必要と

する。仏典に関しては、所在を確認して編まれた目録が、遺冊の欠を補うことになる。しかも、目録の体系がより完全に整えられておれば、背景となった学問の実態に触れる手掛りとなる。こうした目録の整備は、仏典だけにとどまらず、ひろく外典の類にも及んでいたとみるべきであろう。

本邦の目録について、まず取挙げられるのは、藤原佐世撰述の『日本国見在書目録』である。この目録の撰述年代、動機についてはもとより、目録の内容についても様ざまな視点から論究し尽され、諸説区々、その帰するところ無尽である。就中、目録に収録する典籍のうち、現在伝わるもの、不伝の典籍の確認からはじめて、目録に収録しない典籍について詳細な調査を終えている。また、誤字や脱字、さらに国書が若干含まれていることなど、この目録の性格を窺う場合に留意しなければならないという。古代律令制度のもとにあって、貴紳の人びとの教養の基礎的な書物は、漢籍および史籍であった。いくたの目録によって確かめることができる。『日本国見在書目録』は、一易家から四十総集に至る四十家に分ち、およそ『隋書』経籍志に示された配列をとどめていると理解されている。『隋書』経籍志は、所載の内容を経・史・子・集、附載道教仏經にまとめて四部区分の名を付した。四部区分の末尾に道・仏を付載したため、厳密な四部分類にならないと評価するむきもある。『旧唐書』経籍志に至って、道仏を子部に収めて四部分類の基をたてたのであるが、『日本国見在書目録』は、四部の区分はさておき、釈教を除いた内容で構成し、その規模こそは異なれ、『隋書』から『唐書』に至る間に成立した書目として注目に値する。ただ、『日本国見在書目録』中にみえて、隋志や唐志にみえない典籍に注意するむきが早くからあるが、これは彼我の国における書目編纂上の相違点であろう。『日本国見在書目録』は、網羅的にかかげた目録として理解すべきである。早くから整備された仏典目録と対比すると興味ぶかい。

書物の蓄積のあったところには、たいてい目錄が作られていて、蔵書を管理していたことが、いくつかの資料によって確かめられる。弘文院には、内外經書数千卷があり、大江氏の千草文庫にも数万卷の典籍があったが、焼失したと伝える。⁽²³⁾ 読書の記録が日記のなかに記されており、読書の傾向を知る。藤原頼長の『台記』、⁽²⁷⁾ 藤原道長の『御堂閔白記』に詳しく、また、収蔵のための文倉も造立されていた。それぞれの文倉の目錄も編まれていたらしい。⁽²⁸⁾ 目錄として現存するものには、藤原通憲の蔵書目錄、⁽²⁹⁾ 九条家の蔵書目錄などがある。古くから文倉の書籍は、貸出されていたよう⁽³⁰⁾で、書籍入手のために売買されていた。宇治平等院、蓮華王院、法成寺などに蔵書多く、目錄が整えられており、これを閲覧した人びとがあった。一部ながら古目錄が現存している。⁽³¹⁾ しかし、安元三年（一二七七）四月二十八日の大火で尽く都の文倉は失われ、藤原兼実をして「官中文書払底敷」と案じたごとく、重大事であった。

貴紳の人びとの文倉の内容は、『通憲入道蔵書目錄』や、やや後世の文献であるが、九条家文書所載の九条家文庫文書目錄⁽³²⁾にみられるように、經書を中心とした漢籍、本朝の史籍や有職故実の典籍が含まれる。当時、『往生要集』のごとき仏典も書写したりして所持していたが、⁽³³⁾公家の人びとの文庫目錄には不載であった。本朝の書籍は、おおむね『本朝書籍目錄』の大綱に従っているようである。『本朝書籍目錄』自体は、中世に成立をみるものであるが、分類・区分の大綱は、六国史を編成して成った『類従国史』に従っていたから、本朝の知識の区分理念はかなり早く成立し、継承されてきたことになる。有職故実の先例は、早く寛平の頃（八八九―八九八）に成立していたから、⁽³⁴⁾知識の整理の譜は早い時期に確立していたとみるべきであろう。

仏典・外典を問わず、目錄整理の基本構想が整うと、蔵書の多寡はともあれ、既成の目錄に従い、また補いつつ目錄が作成されてゆくことになる。

- (1) 目録は『法宝総目録』第一冊94頁に在る。
- (2) 石山寺一切経は、院政期に僧西念が「或求古経加修補或企新写成部帙」(『増一阿含経』卷四識語)成立したもの。(『石山寺一切経の研究』一切経篇88頁、田中稔「石山寺一切経について」)。
- (3) 石田茂作著『奈良朝現存一切経目録』(『写経より見たる奈良朝仏教の研究』一九三〇年刊所収)。
 鶉飼徹定著『古経題跋』、同『古経搜索録』田中塊堂『日本写経綜覧』昭和二十八年刊。このほか、『守屋孝蔵氏蒐集古経図録』昭和三十九年刊、『唐招提寺古経選』昭和五十年刊などがある。
- (4) 浄土教版『五部九卷』貞永元年版識語による。拙論「善導大師『五部九卷』の書誌研究」(『善導大師研究』昭和五十五年刊)405頁。
- (5) 竹生島宝巖寺蔵『大般若波羅蜜多経』第一百五十八卷識語「於延暦寺宝幢院東実坊／所交點鞍馬寺三本并唐本之／以北尾蓮樂坊勝本偏為興隆仏法／交點畢／今資崇円」この経卷は文永二年に刷本したものを直ちに校訂した。同様の識語は数卷に及ぶ。
- (6) 『東寺観智院金剛藏聖教目録』十二箱「大乘本生心地観経」識語、目録上78頁。一例で枚挙にたえない。
 反面、景雲経や太古本という奈良朝写経でもって校訂するものもあった。拙論「不可他見考」(『文芸論叢』13号49頁)。
 注(4)の拙論432頁。
- (7) 富貴原章信、前章注(3)20頁。
- (8) 井上光貞「東域伝灯目録より見たる奈良時代僧侶の学問」(『史学雑誌』五七編三)。
- (9) 『本朝高僧伝』永超の項。
- (10) 円超録序。
- (11) 石田茂作著『写経より見たる奈良朝仏教の研究』一九三〇年刊、146頁。
- (12) 『諸阿闍梨真言密教部類総録』序。
- (13) 神田喜一郎「日本に伝来する中国書蹟」(『芸林談叢』昭和五十六年刊)129頁。
- (14) 北白川宮所蔵文書『平安遺文』第一卷90頁)。
- (15) 清行の円珍伝の序(『続群書類従』八下)。
- (16) 本朝目録史考(高橋)

- (17) 『大日本仏教全書』 目錄2所収。
- (18) 佐和隆研「唐招提寺の仏画」(『仏教芸術』64)。
- (19) 拙著『久安六年本三国祖師影の研究』(昭和四十四年刊)54頁。
- (20) 例えば『高山寺経蔵典籍文書目錄』など。また『大日本仏教全書』 仏教書籍目錄第二に代表的な目錄を所載する。
- (21) 『大藏会展觀目錄』京都、第六回、大正九年。全文については『法宝總目錄』第三冊に所載する。
- (22) 『大日本仏教全書』2 仏教書籍目錄2 200頁。
- (23) 拙論「善導大師遺文の書誌学的研究」(『善導大師研究』393頁)。
- (24) 『日本国見在書目錄』の研究は、狩谷棧斉にはじまり、狩野直喜、山田孝雄、和田英松博士等々諸説あるが、小長谷恵吉著『日本国見在書目錄解説稿』(昭和十一年刊)にまとめられている。さらに、矢島玄亮著『日本国見在書目錄——集証と研究——』(昭和五十九年刊)では、書目所載の典籍の集証が為されている。
- (25) 『日本後紀』卷八 桓武天皇延暦十八年(七九九)二月の条。
- (26) 『百練抄』『兵範記』仁平三年四月十五日の条。
- (27) 小島小五郎著「頼長修学年表」(『公家文化の研究』中)所載。
- (28) 『台記』久安元年四月二日の条。
- (29) 『通憲入道藏書目錄』(『群書類従』28輯)。
- (30) 『九条家文書』卷五186頁。
- (31) 石上宅嗣の文倉「芸亭」(『続日本紀』天応元年六月の条)。
- (32) 『台記』久安二年三月十一日の条。
- (33) 『玉葉』文治三年八月二十一日の条。
- (34) 『吉記』承安四年八月——九月の条。
- (35) 『玉葉』文治三年三月十五日の条。
- (36) 「平等院御経蔵目錄」影印(『坂本龍門文庫覆製叢刊之貳』昭和三十四年刊)。
- (37) 『玉葉』安元三年四月二十九日の条。

338 例えば『玉葉』治承元年十月十六日の条。

339 例えば『権記』長保五年四月八日の条。除目の用紙について。

四 高山寺聖教目録とその周辺

十二世紀末ころまで、幾多の論疏に引用されてきた元暁の『判比量論』は、その後も仏教研究のための基本図書としての役割を保持してきた。凝然(二二四〇—一三二二)が著わした『華嚴宗經論章疏目録』のなかに、また建長二年(一二五〇)撰述の『高山寺聖教目録』に、それぞれ『判比量論』の名がみえる。そして、少して年代が上がるがこれらと同時期に作成された源空上人(一二三一—一二一九)の『諸宗經疏目録』があり、『判比量論』を収載しないがそれぞれ異った立場で編集されているから、所載の典籍を通して様ざまなことが知られる。凝然の『華嚴宗經論章疏目録』は、書名の示すとおり、華嚴宗に関する諸師の論説を集大成した目録である。藏俊の『法相宗章疏』にみられなかった『判比量論』を収録しているが、凝然の目録が、著者自らが個々の論疏にあたって、実存を確かめた上で編述されたかどうかさだかでない。凝然には、『三国仏法伝通縁起』のごとき著述があつて、仏典資料に精通していたとはいえず、治承四年(一一八〇)東大寺・興福寺などをまきこんだ南都炎上の史実を無視できないからである。ともあれ、鎌倉時代になって華嚴宗の復興は著しく、『華嚴縁起絵巻』に象徴されるごとく、新羅の義湘と元暁の故事は著名であり、なかでも元暁の著述が網羅されたのは当然のことである。鎌倉新仏教の興隆と旧仏教の再興の狭間にあって、新仏教に對してまったく反論しなかつた凝然とは對象的に、徹底的に浄土教を批判された明恵上人(一二七三—一二三三)の興された高山寺に伝わる聖教と、その聖教目録には、仏典を体系的に把握しようとする意図がみられるのは注目に値い

する。

後鳥羽上皇の尊崇をうけて、高山寺を興された明恵上人の事跡については、すでに語り尽されており、いまさら喋々するまでもない。高山寺には、いまも万余の典籍が伝えられており、明恵上人やその門弟の人びとが集められたものであるが、その基本調査を終えて詳細な目録が完成している。現存する資料群は、量質ともに群を抜いて勝れた内容であるが、これらは永い星霜の間に失われたものも少なくない。高山寺では、かつて幾種かの典籍目録が作られており、これらの目録によって往時を伺うことが可能でもある。『高山寺経蔵典籍文書目録』高山寺聖教類第一部に、八部の典籍目録を載せている。すなわち、

- | | | |
|------------------------------------|---------------|----|
| 242 方便智院聖教目録第三 | 室町時代写 | 一冊 |
| 243（聖教目録） | 室町時代写 | 一冊 |
| 244 高山寺聖教目録 | 建長二年 | 一冊 |
| 245 法鼓台聖教目録上下 | 鎌倉時代写 | 二卷 |
| 246 聖教目録 <small>（禪淨房）</small> （外題） | 寛喜三年
建長三年写 | 一卷 |
| 247 高山寺経蔵聖教内真言書目録 | 建長三年 | 一卷 |
| 248 禅上房書籍飲目録 | 鎌倉中期写 | 一卷 |
| 249（聖教目録） | 鎌倉初期写 | 一卷 |

とある。

すべて高山寺経蔵に現存するが、249（聖教目録）⁽⁵⁾、248 禅上房書籍飲目録、246 聖教目録（禪淨房）のごとき個々の目録は、ほ

かにも在ったと考えてよい。244 高山寺聖教目録によると、高山寺には東経蔵と西経蔵、そして法鼓台に経蔵の在ったことが知られる。これら経蔵は「高山寺縁起」にも見え、その経蔵の内容の変遷についても、ほぼ把握されている。⁽⁶⁾
すなわち、244 高山寺聖教目録、246 法鼓台聖教目録、247 高山寺経蔵聖教内真言書目録は、古目録で、当時の経蔵の蔵書内容や伝世の事情について知る手掛りとなる。

『法鼓台聖教目録』は、明恵上人が建立された高山寺内の説法所に付属した経蔵の典籍目録である。密教関係の典籍が主で、外典や私的な典籍を含んでいないゆえに、法鼓台経蔵は、高山寺の公的なものであったと考えられている。⁽⁹⁾他の経蔵に在った典籍は、244 高山寺聖教目録、247 高山寺経蔵聖教内真言書目録として編集されている。高山寺古目録にみられる典籍は、真言密教書目と他の仏典とをわけて目録を編んでいる。真言密教書目と余乗外典とをわけて目録を編纂したのは、経論章疏と真言密教典籍とをわけた目録編成の体系に従ったものである。真言密教の書目はさて置き、経論章疏、外典を選定して編んだ『高山寺聖教目録』の大綱は、つぎのようにまとめられている。

一切経二部

五部大乘二部

大般若経二部

章疏等

華嚴経、華嚴経疏 第一—三十八箱

因明 第三十九・四十箱

三論 第四十一—四十三箱

淨土 第四十四—四十五箱

禪宗 第四十五箱

律宗 第四十六—第五十箱

俱舍 第五十一—五十二箱

悉曇 第五十三箱

伝記并録 第五十四・五十五箱

本經 第五十六—七十四箱

本論 第七十五—七十七箱

章疏等 第七十八—八十二箱

天台 第八十三箱

因等 第八十四・八十五箱

律 第八十六—八十八箱

雜 第八十九・九十箱

因明 第九十一—九十四箱

俗 第九十五—九十八箱

第九十九箱（華嚴經・法華經）

天台 第一百箱

第一百一箱（法華經・金剛般若經）

と、広い範囲にわたる仏典や和漢の外典を多く含んで、八六九点の典籍を収録し、箱ごとに整理されていた。⁽¹⁰⁾『高山寺聖教目録』は、建長二年（一二五〇）に後嵯峨院の仰せに依って、義洲房靈典（一一八〇—一二五五）が撰進したものである。若干の重複や不明瞭な点があるようであるが、鎌倉仏教の高度な学問の体系が示されていると考える。⁽¹¹⁾

元曉述の『判比量論』は、第四十甲箱に、

判比量論 ^{「元曉述（朱書）」} 一卷

と、因明の部に収載されている。目録全体に書名と巻数をまず記載し、撰者・筆者・渡進者・進献者などを、また山内所在経蔵名を注記しており、朱筆墨書で蔵書調査の記録が記入されているから、まぎれもなく当時高山寺に在った典籍の目録であった。しかも、多くの典籍の中から精選された選択目録であったとみるべきである。例えば、第四箱「浄土」の部類には、浄土教典三経の注釈書を収録し、法然上人も閲覧に及ばなかった善導大師の「五部九巻」のすべてを収録している。おそらく、西山の証慧が開板した版本もしくは以前の浄土教版であったかと思う。⁽¹²⁾明恵上人が『摧邪輪』を著わして批判を加えられた法然上人の名著『選択本願念仏集』は、高山寺には三部三帖あったが、『高山寺聖教目録』には記載せず、のちになって朱筆でもって補記されているのが注意をひく。しかも、その一本は、佐法印（佐女牛若宮別当季厳）より贈られてきたものであったが、目録編集の立場上、当初除外されていたものであった。⁽¹³⁾

『高山寺聖教目録』は、選択目録として編集されたものであったが、単に高山寺という一寺院の経蔵目録というにとどまらず、鎌倉時代初葉における仏教の典籍の全容と、鎌倉仏教の高い学問体系を示すものであった。したがって、後世になって『高山寺聖教目録』は、古目録のまま更に追加して『頭目録』が編集されるに至った。『頭目録』は、

寛永十年（一六三三）十一月廿日、古目錄の甲乙録の外聖教十九合、すなわち「自一百二至一百廿」を新たに加えられて出来たものである。高山寺の聖教目録は、その内容が豊富なことと目録体系が整っていることもあって注目されたようで、『法鼓台聖教目録』、『高山寺経蔵内真言書目』と、室町時代に編集された『方便智院聖教目録』を合せて、『高山寺聖教目録』と名付けて写本をいくつか伝えている。

高山寺では、そののち典籍の蓄積のあったことが、現行の目録によって知りうる。そして、高山寺の聖教は、幾多の人びとに利用されてきた。華嚴の鳳潭（一六五七—一七三八）、東本願寺の恵空（一六四四—一七二二）、同、丹山順芸（一八四六）そして栗原柳庵（一八七〇）らの名前を挙げることができる。栗原柳庵は、高山寺経蔵に入り、幾多の典籍を閲覧に及んだ記録『題跋備考』を遺している。記録は識語など影写したもので、所載中「先徳画像」は、『法鼓台聖教目録』三三所収「三国祖師影」であるが、高山寺より市井に流出した。ところで、高山寺の経蔵から典籍が市井に流出している事情について『高山寺聖教目録』を対比しただけで、残存は八六九点のうち一五二点を山内に、山外に三十数点を数える程度である。高山寺経蔵から流出した事情について、恵空の伝記にはつぎのように語られている。「曾聞梅尾蔵高弁已来所集秘匱也願者開彼櫃鍵已數年而不止所志行果而得開藏即至見之淨土部銘函有櫃其書多闕而只終得三五惜哉無乎」。天和三年（一六八三）のことであったという。『題目録』の注記によると、この時期にすでに失われたものがあったが、恵空の行状に示すような状態であったか詳らかでない。恵空が浄土の典籍を求めて高山寺に入ったとき、箱中は皆無であったという。高山寺の典籍を整理し、補修を重ねた高山寺慧友が、東本願寺丹山順芸に、経庫に伝えられた『選択本願念仏集』の一本を献本した。移譲にあたって、鎌倉時代の抄本に他本を自ら校訂を加えての上であった。『高山寺聖教目録』に朱筆で補記した三部三帖が伝存していたのである。三帖の

典籍は、方便智院に移され、『方便智院聖教目録』にあり、順芸の入手した一本には、表紙や見返しに典籍の移動の記録が記録されている。⁽²⁰⁾ 伝記など、修辭をつくして叙述した内容をそのままとりあげることに、いささか躊躇するところである。『高山寺聖教目録』は、経蔵目録という役割からはなれて、仏教研究のための基礎的資料を探索する手掛りとして用いられた。例えば、慶証寺玄智(一七三四—九四)の著わした『浄土真宗教典志』には、「所拠諸目録」のなかに、「梅尾目録三卷」を採録している。

『浄土真宗教典志』には、『浄土初学抄』一卷を所拠の目録にかかげている。『浄土初学抄』は、源空上人撰述という。『長西録』集義録四に黒谷上人選といい、『漢語灯録』に全文を収録しているから、法然上人(一二三三—一二二二)の手になるものと固く信じられていた。『漢語灯録』卷十所収の『浄土初学抄』をみると、東大寺円超録から華嚴宗、延暦寺玄照録から天台宗、元興寺安遠録から三論宗、東大寺平祚録から法相宗、さらに真言、成実、俱舍、大乘律など十一の各宗の論疏のなかから、浄土教に関連する論疏を選んで目録を編み『諸宗經疏目録』という。浄土教者の立場に立脚して評言をかかげて記載したもので、「諸宗学者誰人違背^{センヤ}念仏法門^ニ耶」という立場にあった。しかし、大乘律宗・真言二宗は「各有蓮華部法雖是弥陀之法而非往生浄土之行」と示して經章疏をあげなかった。『判比量論』を含む因明は目録から除外されている。反面、本邦で最も早く書写されながら、奈良時代の写經目録には一切見えなかった録外の章疏である吉藏の『浄名玄論』を収載する。しかし、『浄名玄論』は、安遠録や永超録に所載されていたが、高山寺の目録には見えなかった。⁽²¹⁾ 『浄土初学抄』、『高山寺聖教目録』が、選択目録としてとりえたそれぞれの立場をよく示しているところである。そして、このことから、『判比量論』は、論疏などの引用文から姿を消すことになるのであった。かつて、因明・唯識などの仏教研究の基礎としての論草は、その立場を宗派の所依の典籍中心の典

籍へと移してゆくことになる。そして、宗派の学問を背景とした目錄が出現する。

智積院の謙順（二七四〇—一八二二）が校訂増補した『諸宗章疏錄』は、諸宗章疏錄と、増補諸宗章疏錄から成っている。前半の諸宗章疏錄は、延喜の五宗錄をそのまま収録したものであるから、『判比量論』も、また『浄名玄論』も、目錄上で認めることができる。ところで、この目錄は、五宗錄をそのままうけて増補を試みた仏典目錄が、六波羅蜜寺の恵範（一一六六七）によって作られていた『釈教諸師製作目錄』を補ったものという。恵範の目錄は、さきに成った『諸師製作目錄』を踏襲するものであったが、杜撰の点少なからず、謙順は五宗錄と増補の部分にわけて、増補の卷において五宗を補いさらに密教の諸流の典籍目錄を編んだものである。密教諸流は、野沢両流をはじめ各流の諸師別に章疏の目錄を編んだ。他の目錄に比べて、目錄としての体裁は整えられているものの、典籍の存在を確認する資料とはなりえない。

- (1) 凝然の著『維摩經疏菴羅記』九に、長西との關係を述べているごとく、その門弟の一人に数えられている。
- (2) 『明恵上人と高山寺』（一九八一年刊）に基礎的な書誌が収録されている。
- (3) 築島裕「高山寺経蔵古訓点本の調査研究」（『国語学』一〇九集所収）。
- (4) 高山寺典籍文書綜合調査団編『高山寺経蔵典籍文書目録』第一—四（『高山寺資料叢書』所収）。
- (5) 内容は、林月房聖教目録、禅忍房聖教目録、平泉寺律師頭範聖教目録、理行房聖教目録を収録する。
- (6) 『高山寺聖教目録』（『高山寺資料叢書』十四冊7頁）。

一切經二部之内

一部唐本納西經蔵 刑部入道渡進

一部納東經蔵 宰相僧都真遍之進

五部大乘二部之内

一部 金泥納法鼓台中御門納言自筆

(下略)

- (7) 『高山寺資料叢書』第一冊「明恵上人資料」第一所収。
(8) 奥田勲「高山寺経蔵とその古目録について」(『高山寺経蔵古目』注(6)書籍所収)。
(9) 奥田勲「高山寺経蔵古目録について」(『宇都宮大学教育学部紀要』26)。
(10) 小林芳規「鎌倉時代の高山寺における外典の受容について」、奥田勲「高山寺経蔵の漢籍と明恵上人」(『高山寺古訓點資料第一』所収)。
(11) 注(8)奥田氏論文。
(12) 大山仁快「高山寺聖教目録より見た高山寺の仏教」(『高山寺典籍文書の研究』所収)。
(13) 拙稿「善導大師遺文の書誌研究」(『善導大師研究』433頁)。
(14) 拙稿『鎌倉新仏教管見』50頁。
(15) 仁和寺蔵本、大谷大学図書館蔵本などがある。
(16) 現東京国立博物館所蔵。拙稿『久安六年本三国祖師影の研究』昭和四十四年刊。
(17) 注(8)奥田勲氏論文。
(18) 恵曉述『恵空老師行状記』(善立寺蔵)。
(19) 奥田勲「高山寺典籍の集積と伝来」(『宇都宮大学教育学部紀要』32)。
(20) 注(14)拙稿。
(21) 拙稿「国宝慶雲三年写浄名玄論の書誌学的研究」(神田喜一郎先生追悼論文集『中国学論叢』昭和六十一年刊行予定)。

五 風潭の『扶桑統入総目（録）』

◇『扶桑統入総目（録）』

華嚴宗の鳳潭（一六五七—一七三八）もまた高山寺の経蔵に入り、仏教の典籍を搜索した一人であった。鳳潭は、華嚴の章疏の研究に心力をつくし、天台・華嚴の二宗を融和して、華嚴宗の再興を期した。自らを、賢首大師の正統をもって任じ、華嚴の典籍を刊行して世に流布せしめた。また、自著を多く上梓して諸宗の教義を激しく論難攻撃し、諸宗の学匠もまたこれに反駁して、議論百出、攻撃駁弁すこぶる盛観を呈したという。そして、彼の著わす論章は、丈余に及んだという。法蔵にかえれと主張した鳳潭は、法蔵の華嚴学の研究のために、南都北嶺をはじめ、典籍を蔵する古刹を訪れて、古典籍の搜索につとめ、数多くの仏典を閲覧に及んだ。典籍搜索のなかで、様々な逸話もある程で、その博識と仏教の学問のすすめ方をよく示している。⁽¹⁾それはまた、鳳潭と諸宗学匠との往復弁論の中から、それぞれの宗学が展開し、仏教の学問が盛んになってゆく過程でみとめる。⁽²⁾純粹な華嚴教学の復興を計った鳳潭の学理の基をなすものが、仏典の目録を編んだ偉業のなかに認められるのではあるまいか。

鳳潭が編述した仏典目録は、『扶桑蔵外現存目録』という。玄智の著わした『浄土真宗教典志』にも、所拠目録の一卷として、その書名をとどめているから、抄本以外に伝わらない目録ではあるが、よく知られていたことになる。この目録は、同じ内容で、別名を『扶桑統入総目録』内題「扶桑統入総目」として、京都大学附属図書館に所蔵されている。⁽³⁾この写本は、旧蔵経書院蔵本で、統蔵経編纂の途上に収集された青写真の資料である。結果として、統蔵経

に収録されなかった。書名を異にしてはいるが、内容はまったく同じという目録である。⁽⁴⁾「扶桑統入総目(録)」と「扶桑藏外現存目録」という二通りの書名を統合するとき、藏外現存の典籍を藏経に入蔵すべき目録として作成されたものとみるべきである。

目録の構成をみると、八宗と浄土・禅という配列をとり、基本的には『高山寺聖教目録』に近いものが認められる。そして、七五一点という仏典を入蔵すべき旨を意図した大藏経は、鉄眼版一切経であったと考える。和刻の一切経刊行の計画は、鎌倉時代に浄土教版のなかにみられたが、⁽⁵⁾実現しなかった。宗存版で一部が刊行されたが、全巻の功をみるのは天海版を濫觴とする。しかし、刊行部数少く現存するもの僅かである。⁽⁶⁾延宝六年(一六七八)凡そ十一年の歳月かけて成った鉄眼版一切経は、明万曆版を覆刻して出来たもので、現在も刷りつづけられているものである。倭藏の出現をみて、仏教の学問はいうに及ばず、漢文仏典を読む機会が増加した結果、漢文学や国学の発展を促し、これらの学問と相俟ってさらに仏教の学問が練磨されて行った。⁽⁷⁾鳳潭は、かなり早い時期に倭藏を研究し、かなり短期間に藏経の検討を終えていたことを伺い知る。

鳳潭は、倭藏への入蔵を期して、七五一点の典籍を丹念に調査した。書名の注記をみると、刊写の別、都南、樞尾、南京、興聖、海東など原本の所在などを記入している。典籍を求め歩き、一冊一冊について調査した事実は驚歎することである。しかも、入蔵する典籍目録としての役割をはたすべく、厳密な検討を加えている。内容面から一例を示しておく、善導の著述を集めて、

肆刊觀經義記卷三 善導述

肆刊觀念法門卷一 善導述

肆刊法事讃卷一

善導述

肆刊般舟讃卷一

善導述

と、記載する。善導大師遺文『五部九卷』の中の『往生礼讃偈』を目錄上から欠いていることに気付く。目錄に載せなかったのは、当時存在しなかったのではない。肆刊というのは、書肆の刊本である。五部九卷は、寛文七年（二六六）に丁字屋三郎兵衛の刊本があるから、鳳潭の目に触れなかった筈はない。目錄から『往生礼讃偈』が除かれたのは、この本がすでに入蔵されていたからであるといえる。

鳳潭の目錄には、『判比量論』を南都で閲覽した旨を注記している。

因明判比量論

元暁

南京

写本で伝来していたものを採録したものであろう。目錄のうえで、『判比量論』の抄本の存在を確かめる下限となるものである。『優鉢羅室叢書』を刊行ののち、『判比量論』の流布の記録をとどめるように、神田喜一郎先生から助言をうけたとき、『扶桑蔵外現存目錄』の「判比量論」の記載を示された。鳳潭は、当時現存する蔵外の典籍目錄を編んだが、目錄の異本によって、倭蔵に加うるべき典籍目錄であったことを認めるものである⁹⁾。

入蔵を期して鳳潭が選述した『扶桑統一総目（録）』を最後として、元暁の『判比量論』は、その行方を失ってしまったことになる。鳳潭に師仕した禅宗の宝巖（二六九一—一七六九）が作成した『仏典疏鈔目錄』にも、『判比量論』を載せるが、この目錄は謙順の『諸宗章疏録』や恵範の『釈教諸師製作目錄』と同様に、五宗録を再掲したものであって、鳳潭の目錄とは趣きを異にする。ましてや、自著を多く収録するがごとき立場をとっており、目錄史の上で評価することは論外といえよう。

徳川幕府がとつた仏教の学問の奨励という宗教政策もあつて、仏教の各宗派で学問が盛んとなった。そして、宗派の所依とすべき典籍目録がいくつか編纂された。就中、本願寺の玄智（一七三四—一七九四）が選述した『浄土真宗教典志』は、所拠諸目録として、『貞元新定釈教目録』、『高麗大蔵目録』、『大明三蔵聖教目録』をはじめ、宗乗外の目録として『栴尾目録』、『扶桑蔵外目録』の二目録を依用しながら、著者や抄本、刊本の書誌学的事項についても詳細な考証を付して選述された。鎌倉時代・江戸時代初の現存を記録したこの二目録を用いて、宗学上の目録を選述した例は、玄智以外見当たらない。中国の目録学の立場から、本邦には中国の目録学のごとき学問はみられなかったといわれるなかで、内藤湖南博士が指摘されたごとく、浄土宗の敬首和尚（一六八三—一七四八）の『典籍概見』（宝暦四年刊）などは目録学の用を足しているものである。¹⁰したがって、各宗派の宗学の立場から詳細な研究が成されると、目録や典籍研究の事情が明確になると思う。例えば、宗教々団の中で起つた宗義論争の解決の決手となつた言葉の解釈から発展した、東本願寺靈伝（一七八六—一八四三）の音韻の学問が、国学から出発した国語学史の立場では、ほとんど取挙げられないごとく、仏典研究や仏典目録も同様であつた。けれども、研究の大綱は、それぞれの宗学にゆだねなければならぬ一面があると思う。

◇『判比量論』の消息

因明の論疏の第一として読みつがれてきた新羅元曉の『判比量論』は、鳳潭の『扶桑統入総目（録）』を最後に、目録で確認可能な目録上から消息を断つに至つた。再び記録の上にまみえたときは、文化七年（一八一〇）の模刻の記で述べられているごとく、仏教の学問の資料としてではなかつた。そして、書影は手鑑や掛物の資料として断裁され、

本文を欠き識語・廻向偈のみの姿や、書名すらわからない「論艸」として、あるいは「東寺切」としてであった。『扶桑統入総目（録）』の記載ののち、判明しうる『判比量論』の消息を表示すると、つぎのとおりである。

- 1 文化7年 紫微中台遺品『判比量論』識語・廻向偈（甲という）の模刻公刊、この頃に卷子本を断裁か。
- 2 明治45年 『書苑』7に（甲）書影を所載。
- 3 〔大正1年〕 統藏経に、（甲）翻刻文を所収。（丙という）。
- 4 大正8年 論艸（乙という）紫微中台遺品『判比量論』断簡）公開（『香巖居士薦事会記』）。
- 5 大正13年 『大谷大学図書館和漢書分類目録』（統藏経所載分）（丙）。
- 6 昭和5年 「奈良朝現存一切経目録」刊。
- 7 昭和8年 『仏書解説大辞典』項目所載（丙）。
- 8 昭和42年 『大谷大学図書館和漢書分類目録』第三（統藏経所載分）（丙）。
三紙断簡（乙）書影景印（『優鉢羅室叢書』）。
- 9 昭和44年 『日本仏教』に（乙）再掲載。
- 10 昭和46年 大蔵会展観目録』所載（乙）。
- 11 昭和53年 （甲）原本出現する。
- 12 昭和59年 『仏教叢書総索引』所載（丙）。（甲）原色影印。

以上のごとくであるが、少しく補足すると、(2)『書苑』に紫微中台遺品の『判比量論』識語・廻向偈の書影が掲載され、(3)統藏経に翻刻して収録されると、翻刻部分の書名が、目録(5)(8)に、解説事典(7)に所載された。(8)『大谷大学図

『書館和漢書分類目録』は、各種藏経の内容を載せ、索引を付しているから、(13)『仏教叢書総索引』に示された機能は十分に充されている。

大藏会展観目録は、大正四年からはじめられた大藏会の記念展観の目録であるが、その趣旨は、入蔵を期して新資料を発見し、ひろく紹介することが主たる任務であった。(14)昭和四十六年十一月開催の京都大藏会にあたって、『判比量論』三紙断簡が公開されたのは、大藏会の趣旨においてであった。かつて、鳳潭が入蔵を期して、丹念な調査のうえ目録を編んだが、作成の目録を含めて、所収の典籍の一部が入蔵の機会をえたのはかなり後のことであった。『判比量論』はいうまでもなく、『優鉢羅室叢書』のなかで紹介された仏典が入蔵されるのは何時であるか、大谷大学図書館の書架上で、その機会を待つことになろう。

- (1) 神田喜一郎著『墨林簡話』鳳潭余話の章。
- (2) 拙稿「江戸時代真宗各派の学匠の著書、教学本とその内容」(『講座親鸞の思想』9所収)。
- (3) 京都大学附属図書館蔵本の外題は、『扶桑統入総目録』となっているが、この本を紹介した『図書総目録』には「扶桑総入蔵目録」とする。『仏書解説大辞典』に依ったものであろう。
- (4) 頭注と脚注の相違がある程度である。大正藏経の所依の原本の事情は詳らかでない。
- (5) 前章注(4)拙稿。
- (6) 『大藏経』成立と変遷 昭和三十九年刊。99頁。
- (7) 注(1)文献。
- (8) 佐々木求己著『真宗典籍刊行史稿』224頁。
- (9) 拙稿「鳳潭の扶桑統入総目録について」(『大谷学報』60編4所収)。
- (10) 内藤湖南「敬首和尚の典籍概見」(『内藤湖南全集』十二巻460頁)。
- (11) 『大藏会展観目録』解説(昭和五十六年刊)。